

日本占領期(1937-1945)の北京¹⁾における日本文学の翻訳

鄒 双 双

Japanese Literature Translation in Beijing during the Japan Occupation

ZOU Shuangshuang

For the unstable political situation, the lack of talented translators and the dullness of the publication world, Japan failed finishing large-scale translation business in Beijing under the Japan occupation. Japanese classical literature works were translated premeditatedly in Beijing modern science library though, on Japanese contemporary literature, there was no organization which bundled up the translation.

Translators' motive was various. Some engaged in Translation for Japanese's request, such as Qian Daosun (钱稻孙). Some for earning a living, such as Zhang Wojun (张我军). There were also translators expressing feeling and mind by translation, like Zhou Zuoren (周作人). Many translators tended to choose short and easy literary works and translated quickly to make a living, so that the translation quality was poor totally. However, we found some important translation works in the history of Chinese translation of Japanese literature were also created at that time.

From the perspective of content, few translation work advocated war, but the works themselves and the translation behavior itself were embedded in "Sino Japanese goodwill" and used to promote Japan's war policy no matter what the translator's own motives.

キーワード：日本文学、翻訳、北京、日中戦争

はじめに

長年「満洲」文学研究を牽引した岡田英樹氏は、「満洲」における中国系作家の作品の日本語訳について数本の論文を執筆し、「東北淪陥期日訳文学作品目録」を作り上げたが²⁾、中国人の手になる日本語作品の翻訳に関しては、「あまり調査が進んでいないし、未見資料も多い」³⁾と述べている。大きな研究課

1) 日本に占領されていた時期は「北京」と変名されたが、これまでは長く「北平」を呼ばれていた。本稿では1949年以降、北京という呼称で定着していることに立脚し、「北京」で統一する。

2) 岡田英樹「東北淪陥期日訳文学作品目録(第二稿)」(『外国文学研究』第78号、1987年11月20日発行、立命館大学外国語科連絡協議会) 8-16頁。

3) 岡田英樹「日本語と中国語が交差するところ——「満洲国」における翻訳の実態」(西原和海、川俣優編『満洲国の文化——中国東北一つの時代』、せらび書房、2005年)

題だけに手を付けるのには相当な勇気と努力が問われるであろう。原文資料の翻刻や、データベースの利用などによる第一次資料の収集が容易になるにつれ、近い将来、この種の問題の解決が期待できると思われる。実は、「満洲」より日本に支配されていた期間が短い北京においても、同様な課題が残っている。杉野要吉はかねてからこの課題の重要性に注目して次のように述べている。「これは華北淪陥時期の中日文学翻訳、文学活動、人々の往来などの基本史実に基づいて、さまざまな人々の心理を分析、把握し、また同時期の他の地区との比較や戦前の時期との比較をすることは、有意義な研究課題であることに違いない」⁴⁾とされる。

これまで日本占領期の北京における日本文学の翻訳について、個別の作家や作品の翻訳を取り扱う論文はあるが⁵⁾、もっぱらこれにフォーカスして精査し、全体像を浮かび上がらせる論考は見当たらなかった。言及される程度なら、日本文学あるいは日本書の中国語翻訳史についての研究著書、及び中国淪陥地区の文学を扱う著書において触れられている。前者には譚汝謙主編、小川博編『日本訳中国書綜合目録』(中文大学出版社、1980年)、王向遠『二十世紀中国日本文学翻訳』(北京師範大学出版社、2001年)、查明建、謝天振著『中国20世紀外国文学翻訳史』(湖北教育出版社、2007年)が挙げられる。なかんずく王氏は、1937年から1945年にかけての日中戦争期に翻訳された作品を、①戦前旧訳の再版、②鹿地亘、徳永直を代表とする左翼作家の作品、③張我軍などが訳した淪陥区(日本占領地区)における純文学作品、火野葦平をはじめとする作家たちが書いた所謂「大東亜主義」文学、「皇民文学」、④反戦文学、という四種類にまとめた。ただし、先哲の心血を注がれたこれらの著書は、いずれも全国を検討範囲としており、北京という地域に限定して論述しておらず、ディテールに関する間違いも免れがたい⁶⁾。他方、淪陥地区の文学という視点から、北京の文学翻訳に言及した著書として、張泉『淪陥時期北京文学八年』(中国和平出版社、1994年)、『抗戦時期的華北文学』(貴州教育出版社、2005年)を最も挙げるべきであるが、翻訳の部分となると、ただ翻訳家の紹介にとどまっていることは否めない。ただ、中国文学研究家賈植芳が『中国抗戦時期淪陥区文学史』において、大変示唆に富んだことを言及している。「淪陥区の作家や学者が往々にして外国文学の翻訳と紹介に転じ、人の口を借りて愛国抗敵の思いを晴らしたがため、当時の翻訳文学は一時に盛りを見せた」⁷⁾と。この言葉は、北京にも当てはまるのだろうか。

こういった問題を念頭に置きながら、本稿は日本の支配を八年間の長きにわたり強いられた北京における日本文学の翻訳実態を究明するものである。この時期の北京において、どのような日本語作品が、だれにより、どのように訳されたのかを明らかにしたい。さらに、当時の北京文壇の実態、とりわけ翻訳の主体としての翻訳者たちが異民族支配下のこの空間でどのような思惑を抱いて耐え忍んで生きぬき、翻訳を成したのかを考察するものである。

4) 杉野要吉「まえがき」(『淪陥下北京1937-45 交争する中国文学と日本文学』三元社、2000年) 49頁。

5) 例えば、岸陽子「另外一部“白兰之歌”——浅析梅娘的翻訳作品」(張泉主編『抗日戦争時期淪陥区資料与研究』、百花洲文艺出版社、2007年)、鄒双双「日本占領下の北京における“日中文学交流”——北京近代科学図書館という場において」(日韓次世代学術フォーラム『次世代人文社会研究』第8号、2012年2月)。

6) 例えば、後述する翻訳家張我軍には島崎藤村の「夜明け前」を訳した「黎明之前」と、武者小路実篤の「暁」を訳した「黎明」があるが、王はその二訳作を混同。

7) 賈植芳「序」(徐迺翔、黄万華合著『中国抗戦時期淪陥区文学史』) 2頁。

I 翻訳された日本文学作品

想像がつくように北京が陥落した後、文化環境が一変した。日本軍が入城する前から、文化の主な担い手である知識人の多くが清華大学や北京大学の移転とともに北京を脱出していった。その一方、北京に駐在した日本の文化官僚や、居留作家、旅行に来た日本人作家、台湾あるいは東北から「移民」してきた作家の増加によって、これまでと違う新たな機運を促した。言うまでもなく、日本政府の介入と統制がその変化をもたらした最も重要な一因である。「〔盧溝橋〕事変以来、軍部及び政府は作戦第一主義という宣伝、報道政策を取る。いわゆる作戦第一の宣伝報道政策は、敵とその戦闘力を砕き、滅ぼし、同時に我が国の作戦意義と目的を、敵に、また一般民衆までに貫徹させる宣伝報道である。この方法としては、新聞、無線電信、映画、及びチラシ、壁画などを用いる」⁸⁾と、華北宣伝工作を主管する武徳報社の日本人顧問である亀谷利一が述べているが、実際のところもそうであった。日本は自ら臨時政権と結託して作戦第一の宣伝方針に随従する新民会、新民報、新民印書館を作って言論の流れを引導し、他の新聞雑誌を統制していた。さらに1942年に日本文学報国会の結成に伴い、林房雄や小林秀雄、武者小路実篤といった「文化指導者」を北京に派遣し、華北の文学者を集めて大東亜文学者大会に参加させた。このように、日本は実質的に北京文壇に立ち入ったのである。

それに加わり、翻訳と密接にかかわり、見逃してはいけないのは日本語教育の拡大と普及である。盧溝橋事変後、北京の日本語学校は九七校にも上ったという⁹⁾。日本語学習者の急増に伴う翻訳者の増加は、疑いなく翻訳状況に影響する一つの要素になるはずである。

このような時勢下においてどのような文学作品が訳されたのか。その全体像を把握するために、中国国家数字図書館の民国期刊全文データベース、可能な限りで入手した雑誌を調べて整理してみたが、紙幅の関係で訳作の細目を省略する。当時刊行されたすべての雑誌を網羅したと言えないものの、主要雑誌は視野に入れたため、翻訳の全貌を掴むには差支えがないであろう。整理したデータから見れば、以下の五点が注目される。

1、北京近代科学図書館における詩歌の翻訳。日本「対支文化事業」の一項目として1936年12月に設立した北京近代科学図書館は、積極的に日本文学の翻訳に取り組んだ機構である。館長山室三良の推進と銭稻孫という翻訳者の尽力によって、同図書館が運営されていた八年間においては万葉歌、和歌、俳句、近代詩などが次々と機関誌『館刊』『書滲』に訳載され、『日本詩歌集』、『桜花国歌話』などにまとめられて出版された¹⁰⁾。

2、島崎藤村記念特集。1943年8月に島崎藤村がこの世を去った。その翌月発刊した『日本研究』は直ちに10月号に「島崎藤村記念特輯」を出版した。すでに他誌に発表されたことのある「千曲川旅情の歌」（銭稻孫訳）をはじめ、「初恋」（告邑訳）といった詩歌、張我軍による小説「嵐」の翻訳のほか、張

8) 亀谷利一「華北の雑誌現状及今後新文化的建設方案」（『国民雑誌』第8期、1941年8月）34頁。

9) 王向遠「七七事変後日本在華開辦的日語学校一覽表」（『日本対中国の文化侵略——学者、文化人的侵華戦争』、昆仑出版社、2015年第二版）340-348頁。

10) 鄒双双「日本占領下の北京における日中文学交流——北京近代科学図書館という場において」（『次世代人文社会研究』第8号、日韓次世代学術フォーラム、2012年2月）

我軍による「島崎藤村について」、尤炳圻による「島崎藤村の一生」のような紹介もある。また、『中国文芸』（1943年10月号）には「島崎藤村的文学肖像」のほか、「島崎藤村年譜」と「東方の門」も訳され、掲載されている。言うまでもなく、これ以前も文壇大家の島崎藤村の作品はすでにしばしば紹介されていた。特に北京近代科学図書館は彼の作品を熱心に推奨して翻訳していることがうかがえる。例えば、同館機関誌の『館刊』第3号（1938年3月）に徐祖生訳「老子」、「岡倉覚生」があり、同誌第4号（1938年7月）に銭稻孫による「潮音」、洪炎秋による「十九世紀研究」、第5号（1938年12月）に蘇生による「麩町通信」、銭稻孫による「千曲川旅情の歌」が掲載されているほか、同館月報『書滲』第5号（1939年3月）に「雲のゆくえ」も訳されている。さらに、張我軍による「常緑樹」（『中国留日同学会季刊』1943年6月）と「夜明け前」（『国立華北編訳館館刊』1942年10月～1943年10月）がある。このように見ると、戦時中に藤村の作品は比較的集中して北京近代科学図書館や『日本研究』に訳されていた。このように、一時的ではあるが、多くの藤村作品が矢継ぎ早に訳された。その理由として戦前、藤村の作品があまり中国で紹介されていなかったこと、戦時中に藤村が北京を訪れて現地の人と接触し、それが契機で作品が訳されたといったことが推測される。

3、文化工作のための特集。一つは『東亜連盟』が1942年に組んだ「林芙美子特集」である。『東亜連盟』は中日文化交流を本誌の編集方針とし、文芸作品の紹介も文化交流の一つの主要課題であり、機会があれば日本作家の特集を企画すると唱える¹¹⁾。文芸雑誌でも総合雑誌でもない『東亜連盟』が文学特集を組む政治意図は自明のことである。周知の如く、林芙美子は戦時中、南京、武漢を始め、東南アジアなどの戦地に取材し、活発な創作活動をした流行作家であった。ただ、ここで訳された三つの短篇は内容的には「戦争」と関係がないものである。

翌年、『東亜連盟』はさらに「僑華日本作家作品特集」を企画した。これに関し、特集の冒頭にある編者の言葉によれば、袁犀と長谷川広¹²⁾の斡旋によってこの特集を実現させたという。その狙いが「この幾篇の短文から在中日本人作家の精神と彼らの中国に対する理解を窺ってもらえばと願う」ことにあるという¹³⁾。また、今回に続き、第二、第三、第四回の継続刊行を企画し、それに中国側の作品も日本に紹介する予定だと張り切ったが、頓挫してしまった。

1943年8月『華北作家月報』も長谷川宏及び久米宏一¹⁴⁾の斡旋によって「華北日本作家短篇創作紹介特輯」を掲載した¹⁵⁾。ここで訳されたのは清水信、吉田恍、並びに小浜千代子の作品で、翻訳者はそれぞれ王介人、王真夫、梅娘の翻訳となっている。作者の三人については生卒不詳だが、訳文の末尾に載った紹介によると、清水信は明治大学出身で、1943年8月に日本文学報国会に選抜、派遣されて北京大学で留学し、中国文学を専攻していた。当時は24歳だという。吉田恍は北京の会社に勤める夫に随行して北京に行ったのである。小浜千代子は北京に行く前に、上海に滞在し、現地の日本文学研究者主宰の『長

11) 『東亜連盟』第4巻第4・5期、1942年10月、「編輯後記」、11頁。

12) 袁犀（1919-1979）、小説家。長谷川宏、生卒不詳、「燕京文学社」の同人。

13) 「僑華日本作家作品 前言」（『東亜連盟』、1943年第5巻第6期）49頁。

14) 久米宏一：画家、漫画家、1939年に北京にわたり、1940年3月に『北京漫画』を創刊。南雲大悟「日本占領区における漫画雑誌『北京漫画』について」（『千葉大学人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』（207）、2010年2月）

15) 「編輯後記」（『華北作家月報』第8期、1943年8月）58頁。

江文学』に小説やエッセイを発表した。吉田恍と小浜千代子はまた北京の日本文学結社「燕京文学社」の同人でもあった。

こうしてみれば、日本内地の作家のみならず、日本文壇において「外縁」とされる北京在住の日本人作家の作品も翻訳された。現地の作家同士の交わりが「中日親善」をより確実に現実的なものにさせることだと考えられたであろう。むしろ、これが単なる「中日親善」の国策に応じるための企画だったか、それとも北京文壇内部から自ずと生じた文学交流による結果なのか、定めにくいところである。

4、近現代作品が重要視される。上記した三点が訳作リストを一覧すれば容易にわかる。さらに言えば、近現代のものが圧倒的に多く、和歌以外にすべて明治以降のものと言えるほどの状況である。平安時代の女流文学、鎌倉時代の軍記物語、江戸時代の町人文学などがほとんど姿を見せていない。近現代のものが読みやすいうえに、当時の日本社会を理解するにはより有効で、中国側の翻訳者にとっても中国に日本文化を根付かせようとする日本側にとっても近現代の作品が好都合だったからであろう。近現代作品に限っていえば、個人の名声と影響力の作用及び追悼のために多く訳された島崎藤村を除き、ほかの訳作は、自然主義文学、ロマン主義文学、白樺派というカテゴリーで括るのが難しい。言い換えれば、とりわけ好かれて訳されている特定の作家や、特定の流派の作品があるわけではないように見受けられる。すでに広く知られていた夏目漱石や芥川龍之介の訳があれば、石川啄木の俳句、北原白秋や中原中也の詩や、国木田独歩、志賀直哉、武者小路実篤などのものも訳されている。つまり、様々な翻訳者が異なった趣向や契機で訳していたがゆえ、訳作が多様多彩のありようを見せた。

5、成書したものが多からず、頓挫したものが少なからず。戦時中の北京に出版された日本文学の訳書は下表1に掲げたようなものがある。

表1 日本占領期の北京に出版された日本文学の訳書

書名	翻訳者	出版社	出版年	原作
土与兵	金石	北京：東方書店	1939	火野葦平『土と兵隊』
転生	銭稲孫	北京近代科学図書館	1939	志賀直哉『転生』
落葉松	尤炳圻など	北京近代科学図書館	1940	尤炳圻訳「落葉松」（北原白秋）、張我軍訳「鼻」（芥川龍之介）、尤炳圻訳「土佐日記・方丈記抄」、銭稲孫訳「日本古歌詮訳」が収録。
日本詩歌選	銭稲孫	北京近代科学図書館	1941	
現代日本短篇名作集	張深切編訳	新民印書館	1942	張我軍、尤炳圻などによって谷崎純一郎、志賀直哉、菊池寛、横光利一、武田泰淳などの作品が訳出。
中国文学与日本文学	梁盛志	国立華北編訳館	1942	青木正児
桜花国歌話	銭稲孫	北京中国留日同学会	1943	
黎明	張我軍	太平書局	1944	武者小路実篤
日本童話集 二冊	張我軍	新民印書館	1942年、 1943年	

（張泉『淪陥時期北京文学八年』（中国和平出版社、1994年）によれば、武徳報社が発行した冊子『万人文庫』には、王真夫による森鷗外の「燕」が連続掲載されている。また、『日本小説選訳』、『日本女性作家小説特輯』、『日本小説訳集』などが発行されたという。筆者未見。）

表1は出版された訳書を示しているが、実際時運に恵まれず頓挫したものもある。華北作家協会が1942年『日本文学全集』を出版させる企画を立てたという。しかも収録内容と翻訳者を松尾芭蕉集（白林訳）、

森鷗外集（王真夫訳）、丹羽文雄集（柳龍光訳）、有島武郎集（共鳴訳）、川端康成集（辛嘉訳）、石川達三集（梅娘訳）と選定し、翌年の春早々実現させると予告した¹⁶⁾。一年後、当誌は「会務動態」で「日本文学叢書がもうじき刊行」と宣言する。これによると、毎月300頁にわたる長さの1冊または2冊を刊行し、中には日本古代及び近代文学の名著を盛り込む予定で、翻訳者も周作人、白林、王真夫、辛嘉、柳龍光、尤炳圻などが決まっていたという¹⁷⁾。結果、翻訳事業が企画倒れになった。物資不足が最大の要因と考えられる。

II 翻訳者について

翻訳者の中、今日では身の上を突き止めることができない者が多い。うち、主戦力となっていたのは、戦前より翻訳に従事したベテラン翻訳家の数名である。北京の日本文学紹介者といえば、真っ先に思い浮かぶのは周作人であろうが、彼は戦時中日本文学より西洋文学の翻訳に打ち込んでいたがため、日本文学翻訳の主戦力からはずれた。むしろ牽引したのは下記のような翻訳者らであった。

銭稻孫（1887-1966）、浙江湖州生まれ、父銭恂が清末外交官、母単士厘が詩人。1900-1907年日本留学、その後4年間ヨーロッパ遊学。帰国後、民国政府教育部で勤務し、1927年辞職して清華大学外文系・歴史系専任講師として招かれる。北京が占領された後、南下せず残る。戦前美術、歴史、西洋文学といった領域の作品を、戦中、戦後『万葉集』を筆頭に数多くの日本文学作品を訳す。1946年に「漢奸裁判」に掛けられ有罪とされる。代表作に『漢訳万葉集選』、『井原西鶴・近松門左衛門作品集』などがある¹⁸⁾。

張我軍（1902-1955）、台北生まれ、幼い時から日本語教育を受ける。新文学運動に啓発され、台湾で新文学運動を提唱。1926年北京に渡り、「北は張我軍、南は魯迅」とも称されるほど頗る活躍ぶりを見せる。日本占領下の北京に踏みとどまり、教育や翻訳に携わる。島崎藤村、武者小路実篤などの作品を訳す。1946年北京を離れ、1948年に台湾に帰る¹⁹⁾。

尤炳圻（1912-1984）、江蘇無錫に生まれ、北京師範大学卒業後、東京帝国大学に留学し、国文学を専攻。帰国後、北京大学日文系で日本語教師をしながら翻訳活動に取り組む。訳著には『一個日本人的中国観』（内山完造著『生ける支那の姿』）、『我是猫』（夏目漱石著『我輩は猫である』）などがある²⁰⁾。

徐祖正（1894-1978）、江蘇昆山生まれ。1911年10月10日に起きた武昌起義に参加する。同年日本に渡り、同文書院での勉強を経た後京都帝国大学に入学し、西洋文学を専攻。帰国後、北京高等師範学校で教鞭を執りながら翻訳に従事する。戦時中、北京に留まり、北京師範大学の学長を務める。日中戦争終了後、張家口外語学院で教える。1949年以降、北京に戻り、北京大学東方語言文学系教授として教育と研究を続ける。島崎藤村と面識があり、藤村の「新生」、「春」などを翻訳。中編小説「蘭生弟的日記」

16) 比目「華北文学一年」（『華北作家月報』第3期、1942年12月）5頁。

17) 「会務動態」（『華北作家月報』第5期、1943年4月）4頁。

18) 鄒双双『「文化漢奸」と呼ばれた男——万葉集を訳した銭稻孫の生涯』（東方書店、2014年）。

19) 田建民『張我軍評伝』（台湾作家研究丛书之一、作家出版社、2006年）。

20) 王培青「尤炳圻生平及其著訳」（『魯迅研究月刊』、1996年第7期）。

をも創作²¹⁾。

洪炎秋（1899-1980）、台湾出身、北京大学卒業後、1946年まで同校で教員として勤務。1932年北京で人人書店を開き、主として日本の図書と雑誌を扱う。その後、台湾に引き上げ、教育家、作家として活躍する²²⁾。

無論、ここに列挙した者以外に、東北出身の作家梅娘、日本語学習者王真夫、日本勤務経験のある傅芸子²³⁾、傅仲涛²⁴⁾などの名前もしばしば目に入る。ほかに、『国民雑誌』に訳作を掲載した楊為岳、馮盈、呂奇、浮蛉、岳蓬など。『東亜聯盟』に訳作を寄せた白練、呉藻寰、湯磐、丁敏、林蒼、魯風、田波、そして『中国留日同学会』に投稿したことから留日同学会に属すると推測される魏敷訓²⁵⁾、楊燕懷、王錫祿、林美子、錢稻孫の息子である錢端義²⁶⁾など、まったく後世に名を遺していない名前も見られる。しかも、彼らには一回きりで投稿した者も少なくない。ここから見れば、彼らは錢稻孫や張我軍らと違い、翻訳を生業にしておらず、翻訳者としての素質と訓練が限られていたことが想像される。錢稻孫のような日本留学の経験を持ち、もしくは張我軍のような台湾で日本語教育を受けた者は翻訳が務まるとしても、無名な翻訳者を含めた翻訳者全般の素質は懸念されていた。1942年11月5日付の『庸報』で連載を始めた尤炳圻訳「我是猫」に対する錢稻孫の書評の中でこのように述べられている。

尤先生が「猫」の翻訳を始めたのは、実は七、八年前だった。翻訳が完成したところで、いつまで経っても発表しようもせず、ただ改訂に改訂を重ねていた。彼は忙殺される中でも、改訂・研究を忘れた。日本文学の翻訳は、短篇以外に、大多数が全訳ではない。翻訳も大抵完成すれば見直しはしない。ましてや改訂、研究。そのため、日本文学の翻訳は、十部のうち九部には誤訳がある。

改訂と研究を重ねられた尤炳圻訳「我是猫」は好評に値するが、当時ほとんどの翻訳作品は完成を急がれて誤訳が多いという。それには翻訳者の根気なさの不真面目さが原因だと錢稻孫は分析している。錢が尤炳圻の真摯な翻訳態度を際立たせるために大袈裟に述べている可能性も排除できないが、その頃の訳作の質には大きな落差が存在したのは確かであったろう。さらにその原因について、「盧溝橋事変後、華北文壇には偉大なる作品の訳出がまだ見られない。原因は明らかである。第一、外国語が分かる人（新人）の欠乏。第二、多方面の関係で沢山の作品が翻訳を許されないこと。第三、翻訳者の根気不足²⁷⁾」との分析がある。要するに、偉大な作品が訳出されなかったのは、翻訳人材の欠乏（＝知識人層の移転）、翻訳を許容される作品の少なさ（＝検閲）、翻訳者の根気が足りないことが起因しているとされ

21) 董馥榮「徐祖正駱駝書屋所藏“閩閩叢珍”」（『文献』、2007年第2期）

22) 楊紅英「多重困境下的文化選取——洪炎秋大陸時期的文学文化活動研究」（『台湾研究集刊』、2009年第3期）

23) 30年代に『北京電報』を編集し、民間芸術を研究する。1938年4月から1942年3月まで京都帝国大学、東方文化研究所で講師を務める。戦時中、「北京大学」文學院講師、国立北京図書館編目部主任を担当する。

24) 戦時中日本統制下の「北京大学」文學院教授。

25) 1940年5月から1942年3月まで東方文化研究所（京都）で研究員をする。

26) 東北帝国大学出身、言語学と英国文学を専攻。

27) 端木云青「三月来的華北文壇」（『華北作家月報』第5期、1943年3、4月）

ている。ここでは翻訳者の根気なさがあらためて指摘されている。長篇訳作が少なく短篇が圧倒的に多かったのはその証左ともいえるであろう。なぜ翻訳者たちが短篇を好み、完成を急いだのか。執筆力、性格、原文の難易度など様々な原因が考えられるが、翻訳者が直面させられていた経済状況が何より大きく働いていると思われる。

資料によると、1941年日本発行の貨幣が急に下落し、物価が高騰し、食糧不足で食品価格も大いに値上げしていたという。トウモロコシ粉を例に挙げれば、その価格は二年前の1939年より11倍も高くなったとか。1943年北京の金融市場が混乱に陥り、貨幣がさらに下落し、物価は飛ぶかのように高まり、物資の供給が追いつかなくて、紙の供給不足による新聞雑誌の停刊も相次いでいた。1944年の状況を見ると、普通の公務員の月給は300元ぐらいに対し、トウモロコシ粉が一キロ10元、油が一キロ80元というように食品は高値が付き、人々の生活が苦しくなる一方であった²⁸⁾。翻訳者が実生活においてこのような苦境と戦わざるを得ないため、一刻も早く訳作を発表し、執筆料を日々の生活費の足しにしたいという焦燥感に駆られて、どうしても訳作の質を犠牲にしなければならなかったのであろう。なんといたって作品の完成度より命の存続にかかわる生活費の獲得が切羽詰まった問題で優先されたのである。

とにかく、翻訳者の翻訳能力が粒揃いではなく、訳作の質における明らかな良劣が見られる。このような現象は恐らくいつの時代にでもあるもので、敢えて特筆する必要がないかもしれないが、ただ、その良劣が生じる背景には異民族支配、戦時中という特殊な環境に置かれた翻訳者の面した生活難という切実な問題があるということを指摘したい。

Ⅲ 翻訳者の境遇と思惑

上述してきたように、この時期に訳された日本文学の作品は時代や題材に拘らず、古典から近現代、短歌から歌謡、小説など多岐にわたるジャンルのものであった。その一つ一つの翻訳作品はまたおのの独自の成立経緯を経て完成されたものである。以下、翻訳作品の成立経緯という視角から翻訳者の直面した境遇をさらに見ながら、彼らの翻訳時の思惑を窺いたい。

一つの典型的なケースは生存のために自ら訳し始めることである。例えば、張我軍訳の島崎藤村『夜明け前』がその一つである。張我軍は物価上昇に耐え切れず、途方もなく周作人に仕事の斡旋を請ったところ、島崎藤村の「夜明け前」を勧められたのがきっかけで、「夜明け前」を訳し始めた。しかし、一年後、張は生活を維持するために訳しにくい「夜明け前」をやむを得ず中止し、他の作品の翻訳に転じた²⁹⁾。難しい暮し向きに追い込まれたがために、難しい作品の放棄を余儀なくされた状況はほかの翻訳者も経験したと考えられる。

もう一つのケースは日本人の依頼を受けて訳すという形態である。例えば、今日において日本文学翻

28) 「北平淪陥時期大事記」(中国人民政治協商会議北京市委員会文史資料研究委員会『日偽統治下の北平』、北京出版社、1987年)

29) 鄒双双「日本占領下の北京における張我軍の翻訳活動について——島崎藤村、武者小路実篤と関連して」(増田周子編『戦争の記録と表象——日本・アジア・ヨーロッパ』、関西大学出版部、2013年3月) 173-182頁。

訳家として評価されている銭稻孫であるが、戦前においては、医学、美術、西洋文学・考古歴史といった領域に手を付けたのみで、日本文学にあまり手を伸ばさなかった。しかし個人の興味本位で『源氏物語』を試して訳したが、一度も公表していない。本格的に日本文学に転向したきっかけは、日中戦争の勃発直前に北京近代科学図書館の代理館長を務めた山室三良の依頼であった。それがきっかけで戦時中、『日本詩歌集』、『桜花国歌話』など訳詩集を作り、志賀直哉や島崎藤村の小説を訳すようになった。同時に、佐々木信綱と協力して万葉歌300句を中国語に訳し、出版できるように取り組んでいた。それは終戦までは成しえなかったが、紆余曲折を経た1959年に中国初めての『万葉集』訳本として『漢訳万葉集選』（日本学術振興会、1959年）が世に出たのである³⁰⁾。

とにかく、銭と山室、佐々木の間の交遊は、翻訳をめぐって展開されたプライベートレベルのものでありながら、日中不和という不幸な時代に結ばれたものであるため、本人の否応もなく「文化建設」、「日中親善」という日本側の思いよがりにより寄与してしまったことになる。日本人の依頼を引き受けて翻訳した銭が自分の行為をどう認識したのか。譚汝謙は同じく受託作品の銭訳『桜花国歌話』に対し、「日本古代の愛国詩人の作品を通じて淪陥中の中国人を鼓舞しようとするには、銭の真の意図があるのではないか³¹⁾」と述べている。確かに、銭の翻訳動機には日本による押しつけ、執筆料狙い、趣味のほか、「中国人を鼓舞しようとする」思惑もあったかもしれない。そもそも作品に託して志を言うというのは物書きの常用手法であるから。

作品に託して志を言うと言えば、あの名高い周作人が戦時中に訳した坂本四方太「夢の如し」もそれに当てはまると思われる。「夢の如し」を選んだ理由について彼は次のように述べている。

翻訳は容易なことではない。才能が足りないからだ。分かりやすい理屈だ。しかし、やはり翻訳しようと思うのはなぜだろう。日本には明治維新があった。既に過去のこととはいえ、中日両国の国民には相互理解の可能性があるとすれば、この維新の精神を基礎にしなければならないと考える。明治時代の日本で留学した私たちは、当然あの時に対してはより一層懐かしく思う。文泉子のこの本は、児童生活と明治風習を描いた。至って喜ばしい。また私と縁が深いので、容易なことではないと分かりきっているにもかかわらず、訳したいといつも思うわけだ。語学力と文才を備えた、頼める人は、探せば必ずしもいないとは限らないが、彼らが知っている日本は近頃西洋化された日本で、明治時代に対してはおそらく隔たりを感じるだろう。これは、まるで背広を着る青年に、紺色のシルクの夾袍を着る老人と付き合いなさいと頼むように、二人の間には三、四十年のギャップがあって、話を弾ませるのは難しい。能力不足のうえ、暇も多くないにも関わらず、やはり自分で訳すと決意したのは、それが理由だ³²⁾。（筆者訳）

30) 銭稻孫の生涯及びその翻訳経緯、日本人との交遊については前掲鄒双双『「文化漢奸」と呼ばれた男——万葉集を訳した銭稻孫の生涯』に詳しく述べられているため、ご参照されたい。

31) 譚汝謙「中日之間訳書事業的過去、現在与未来」（譚汝謙主編『日本訳中国書総合目録』、香港：中文大学出版社、1981年）92頁。

32) 周作人「如夢記」（『芸文雑誌』第1巻第6期、1943年12月）8頁。

周作人が「夢の如し」を訳したかったのは、そこに描かれた明治時代が彼にとってはまたと経験できない懐かしい留学した時代であり、夢のごとき時代であった。彼自身はあの時代に戻ることができないし、中日両国の関係も日中関係においての「黄金の十年」と言われるあの明治末期のように戻れない。明治時代の維新精神が彼から見れば中日理解に必要であり、その礎である。中日が軋轢している今だからこそ、あの時代がなおさら懐かしく思われたであろう。

さらに、著者坂本四方太は「自序」で「自身は之を綴り之を読む間は、現在の煩雑なる精神状態から逃れて、少年時代の醇良なる感情に立返り得た」³³⁾と吐露しているが、周作人もこれを訳すことによって煩悶で無力感を感じる精神状態から逃れて、淳良で無邪気な少年時代に立ち返ることを望んでいたのであろう。要するに、彼は著者の執筆時の気持ちが自分のと重なって見えて、「夢のごとし」に同感と慰安を求めていたと考えられる。

ちなみに、その息子周豊一が訳した[銀の匙]は、本当は周作人が訳したがった作品である。それに手が回れないから息子に翻訳させた³⁴⁾。「銀の匙」は「夢の如し」と同様に、少年時代を描く物語である。しかも、小説には、小学生の主人公が日清戦争について日本が「きつと負ける。きつと負ける」と口走る場面がある。他にも露骨な反戦表現もあった。訳作の掲載は、『芸文雑誌』の停刊で打ち切られたがため、そこを訳出することができずじまいであったが、「銀の匙」を愛読しこれを訳そうと思った周作人は、真っ最中の日中戦争に対し「日本はきつと負ける」と密かに願っていたのかもしれない。

おわりに

1943年日本文学報国会に派遣されて北京を視察した林房雄は、事変以来の六年間北京における中日現代文学が厳格に言えば「交通断絶」の状態にあると述べている³⁵⁾。確かに、北京近代科学図書館で計画的かつ長期的に日本古典文学は翻訳されつつあったが、日本現代文学の場合は、その翻訳事業を束ねる機関や組織はなかった。文学報国会が「大東亜」を対象とした大規模の翻訳委員会を設立したと噂されたが³⁶⁾、とうとうこれも実際の行動を起こさなかった。それに加わり、不安定な政治情勢、翻訳人材の欠乏、物資不足による出版界の不振などの原因で、日本は日本文化を宣揚し、戦争文学を提唱する企みがあったものの、日本占領下の北京において大規模な翻訳事業を成すことができなかった。むしろ、翻訳者それぞれの愛好や都合でできたものが多かった。

翻訳行為そのものは、翻訳者にとって生活を維持するための手段でありながら、おのずと思いや志を表現する方法でもあった。錢稻孫のように国策に従従せざるを得ない機構において翻訳に取り組んだ人がいれば、切羽詰まった生活に追い詰められて翻訳に従事した張我軍のような翻訳者もいた。また周作人のように、翻訳作品を通じて胸中の鬱憤、厭戦の気持ちを密かに伝えようとする人もいた。等々。そ

33) 坂本四方太「自序」(『夢の如し』、民友社、1909年9月)

34) 『芸文雑誌』第3巻第1期、1945年2月、13頁。

35) 林房雄「新中国文学運動」(『中国文芸』第9巻1期、1943年9月、41頁。

36) 同上。

の翻訳動機は十人十色であった。

多くの翻訳者が生計のために翻訳を行ったため、短篇あるいは訳しやすい作品を選ぶという傾向があった。それゆえ、良質な訳作の確保が難しかった。が、『日本詩歌選』、及び『万葉集』の初めての中国語訳本である『漢訳万葉集選』を生んだ銭稻孫の翻訳は、結果的には日本文学の翻訳史において大きな足跡を残した。したがって、20世紀の中国における日本文学の翻訳史を語るには、戦時中の北京における日本文学の翻訳を抜きにしてはならない。

翻訳された作品の内容から見れば「宣戦」作品がほとんどないが、意図的に「中日親善」を宣揚するための企画に組まれたものがある。個人の翻訳が「国策」と都合よく関連付けられて利用されたケースもしばしばある。このように翻訳・掲載に際し、日本人と切り離すことができず、政治的・非政治的に絡み合ったということは、まさに当時の北京文壇の「ねじれ」と「不鮮明さ」を表出したと言えよう。

（本稿は中国教育部人文社会科学研究青年基金項目「翻訳家銭稻孫研究」（15YJC752052）の一部成果である。）

